

都市の夜の魅力とフーゾク街を排除しない都市再生の可能性について*

The nocturnal lure of the city and the possibility of urban regeneration non-eliminating red light districts *

大矢正樹**

By Masaki OYA**

猥雑(わいざつ)： みだりかわしく入りまじること。みだれまじること。下品な感じがすること。げびて、みだらなこと。(広辞苑)

1. はじめに

「構造改革」の旗じるしの下に進められた(進められている)「都市再生」とは、いったい何だったのかは、近い将来論じられることになるだろうが、それが都市魅力の向上につながったかどうかについては、疑問の余地があると言わざるを得ない。盛り場は都市魅力の重要な構成要素であり、地区整備における“猥雑性”の担保の重要性も広く認識されているものの、実際の「都市再生」ではそのような“猥雑性”を排除する方向で進められているのが現状ではなからうか。本稿では、時代毎の「盛り場」をフーゾク街との関連でレビューするとともに、“猥雑性”を担保したまちづくりの可能性について検討したい。はじめに夜の盛り場の歴史を簡単に振り返った後、政府によるフーゾク街の規制方針がどう変化したかを検討し、“猥雑性”を担保したまちづくりの可能性について展望する。結論を先に言えば、98年の風俗営業適正化法の改正により、デリヘリの公認とフーゾク街の規制強化がセットで実施され、さらに2005年より「大都市等の魅力ある繁華街の再生」「都市の安全・安心の再構築」が進められた結果、フーゾク街は今後ますます減少し、“猥雑性”を担保したまちづくりの可能性はさらに減少すると思われる。

2. 夜の盛り場の変遷

(1) 江戸文明と夜の盛り場の出現

鬼頭宏によれば、徳川日本は西欧社会の世界システムとは異なった特徴を持つ一つの完結した文明システムであったという¹⁾。それは、「日本列島内部での相対的には自己完結的な閉鎖体系」であったが、「自立的な人口

* キーワーズ：観光・余暇

** 正員，株式会社環境創造

(京都市中京区新町通四条上ル小松町426-1 新町錦ビル，TEL:075-254-8811，E-mail:oya@issr-kyoto.or.jp)

増加、資源の有効利用など」により「独自の“発展”」を遂げた「意外に豊かな社会」であった。わが国における夜の盛り場はこの江戸文明の中で誕生したが、そのメルクマールの一つとして、1656年(明暦3)元吉原から新吉原移転に際し夜間営業が許可されたことがあげられよう。新吉原は“不夜城”と呼ばれたが、それを可能にしたのは増加する菜種油の生産力、船舶による輸送システム、発展した貨幣経済と金融決済制度といった文明の力であった。「誠一郎は、衣紋坂を降りながら、初めて吉原を望見した。恰度、灯のいったところだった。土堤の暗さにひきかえて、眩しいばかりの明るさである。誠一郎は、足をとめていた。夜の中のこれほどの華やぎを、誠一郎は生まれて初めてみた。…不意に、三味線の音が湧き上がった。それも一挺や二挺ではない、ゆうに百挺をこえる三味線が、一斉に、同じ音色を奏ではじめたのである。」²⁾この誠一郎の驚きは、吉原を初めて訪れた者皆の驚きであったに違いない。

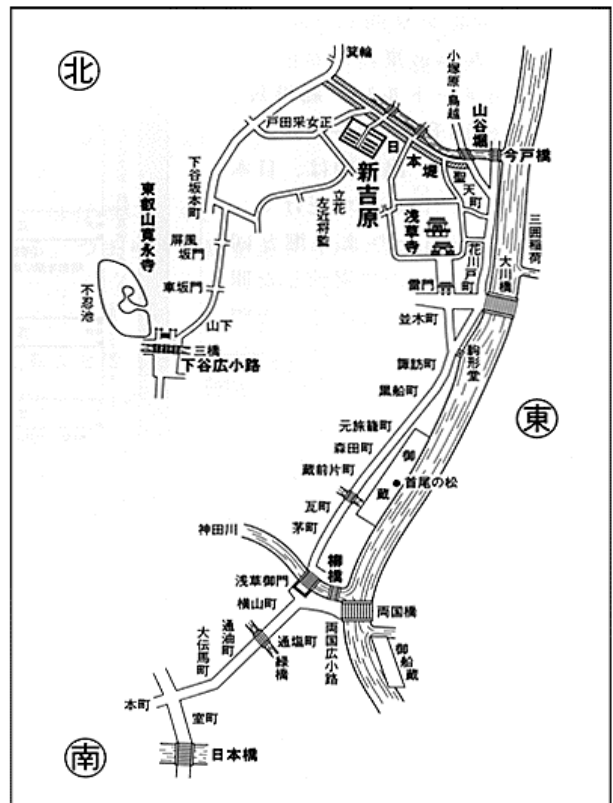


図 2.1 吉原周辺図 (出展参考文献2) p.53)

吉原は客にとっては格式が高く高価な遊び場所であった³⁾から、深川や柳橋といった岡場所が方々にでき現在まで続く花街の原型となった。交通の要所である橋詰周辺や参詣人が多い寺の境内に、茶屋、料亭、岡場所が軒を連ねるといのが、江戸、大阪、京都といった大都市だけでなく城下町の盛り場の一般的な形態であった。江戸文明は現在につながる都市を作ると同時に、夜の盛り場を作ったと言える。またこのような夜の盛り場から江戸文化が生まれたことについても注意を喚起しておきたい。「もしも文化が、人間の多少とも自由な精神活動の所産であるとするならば、江戸時代の文化といえるもの、絵画・文学・演劇等々の大部分が、こうした場（遊郭、賭場、芝居小屋等々を指す、筆者注）を媒介としてしか生まれえなかったことを、一体、どう考えたらよいのか。⁴⁾」という網野の指摘は重要である。網野の「絵画・文学・演劇等々」の「等々」の中には、辰巳芸者の「いき」とか、吉原花魁の「はり」といった美意識も含まれているとみてもよいであろう。九鬼周造は、「いき」とは畢竟わが民族に独自の「生き」かたの一つではあるまいか。⁵⁾」と書いたが、遊里の持つ文化的な力の大きさを認識することができる。

(2) 1920年代の盛り場とモダニズム

江戸文明は明治維新を境に衰退していったが、明治時代における夜の盛り場は19世紀末までの電灯照明の普及を除けば江戸時代とそれほど大きな差はなかった。1908年（明治41）7月数年にわたる欧米滞在を終えて帰国したわが荷風先生も、夜の遊びは柳橋や新橋の芸者遊びであった⁶⁾ことからそれがみとれる。夜の盛り場に大きな変化が訪れたのは1920年代のことであるが、この大きな変化が欧米とほぼ同時に訪れたのはわが国の歴史上初めてのことでありその意味でも画期的であった。世



図 2.2 1929年に公開されたオールカラー・オールトーキー映画のポスター（出展：Wikipedia 1920s）

世界的に20年代をキーワード風に振り返れば、自動車、映画、ラジオ、ジャズ、ダンス、キュビズム、シュールリアリズム等々があげられる。

日本でも欧米とほぼ同様の「都市の時代」を謳歌するようになり、モダンボーイ・モダンガールが夜の盛り場散歩を楽しみ、カフェでリキールを飲み、ダンスに興じるのが最先端の風俗であった。加藤正洋によれば、この時代に都市の盛り場は江戸時代から続いた商業空間と盛り場空間が分離した形から、劇場、映画館などからなる娯楽街と商店街等が結びついた「総合盛り場」へと変貌し、現在にも通じる盛り場娯楽の風景を創りだしていったのである⁷⁾。25万枚もレコードが売れた「東京行進曲」⁸⁾の「昔恋しい銀座の柳、仇（あだ）な年増（としま）を誰か知る」はこの盛り場変貌の機微をよく伝えている。そして20年代の夜の盛り場を特徴づけたのは何といってもカフェであった。村嶋によれば大阪道頓堀界隈だけでも「二千に近い女給が錦少の袖をひるがえしてイット（性的魅力、筆者注）を発散」していたし⁹⁾、名古屋の中村遊郭でもカフェの方がはやっているありさまであった¹⁰⁾。石川栄耀が日本で初めて「夜の都市計画」の重要性を指摘し、幾多の「盛り場」論を発表しプランを考えたのは、このような20年代の盛り場を背景としたものであった。

石川栄耀は1918年（大正7）に東京帝国大学土木工学科を卒業後、20年の都市計画法施行を機に内務省に入省、33年まで名古屋市の都市計画に従事しているから、彼の盛り場論は名古屋での経験を反映しているとみてよい。実際、石川が着任した年（1920）の4月には、大須観音の裏手にあった旭遊郭の移転先である愛知郡中村（当時、現名古屋市中村）で整地事業が着手されており、旭遊郭が中村に移転（1923）後の大須をどうするかは地元の大きな関心事であった。大須が繁盛した理由の半ばは旭遊郭のおかげであったから、遊郭を飯の種として居た人たちがこの先どうなることかと蒼くなった¹⁰⁾のも無理はない。後年（1944）石川の発表した盛り場プランと盛り場の条件¹¹⁾・¹²⁾の中の「花柳中心が程よき距離にある事」に、大須の経験が石川にとって如何に大きなものであったか、また大須が旭遊郭の中村移転でこうむった打撃がいかに大きかったかをみとることができる。

(3) 盛り場空間とフーズク～敗戦後から現在まで～

1945年（昭和20）8月の敗戦後わが国は焦土の中からの出発を余儀なくされたが、1950年の朝鮮戦争勃発に伴う“特需景気”という幸運もあり、1955年には敗戦前の水準を回復し（この年に発表された経済白書の「もはや戦後ではない」は流行語となった）、1960年代からは高度経済成長を遂げるようになった。デパート・ブランド店等からなるショッピング空間（ハレの空間）、飲屋・ゲームセンター等からなる歓楽街（ケの空間）、

その周縁域という「盛り場の3層構造³⁾、¹⁴⁾」が確立したのも1960年代のことであった。戦後の盛り場形成に大きな影響を与えたのは1956年(昭和31)の売春防止法の成立と1958年4月1日からの完全施行であった。戦後盛り場周縁域に「赤線」と称されながら存続していた日遊廓は姿を消し、フーズク店という特殊な形態が存在することとなった¹⁵⁾。北村は、ハレの空間は女性中心の街、ケの空間は男性中心の街であるが、1980年代末~90年代初頭以降顕著になった女性の社会進出に伴い「ケの空間にコジャレたハレの空間が進出」しつつあると、近年の盛り場変遷の大きな要因についていわれている¹⁶⁾。

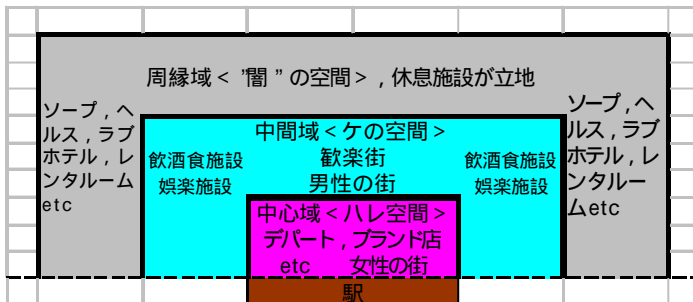


図 2.3 駅周辺の盛り場の三層構造 (イメージ図)

2. 政府によるフーズク街規制の変遷

(1) 江戸時代~戦前の規制

江戸時代における遊廓の規制方針は、都市の郊外に集約するいわゆる集娯方式というものであった。元吉原は1617年(元和3)に日本橋區本町(現在の日本橋區留町1丁目のあたり)に幕府によって傾城町とすることを許可されたが、葎茅(よしかや)が茂っていたので葎原(よしわら)と名づけられたが、後に縁起を祝って吉原に書き換えたと言われている。江戸のまちが整備され拡大するにつれて、吉原も都市内に包摂されるようになったため、さらに郊外に移転させられたのが1656年(明暦3)元吉原から新吉原への移転である。幕府によって公認されたのは吉原だけであり、岡場所は違法ではあるが黙認されていた。

このような幕府の集娯方式は明治に入ってから政府によって引き継がれ、娯楽場を一定の場所に囲い込み、できるだけ一般市民の眼にふれないようにすることが政策となった。「淫売は人間の社会生活に必然的につきまとうもので、之を絶滅するわけにはいかない。風紀警察の目的は一般の善良な風紀を害しないようにこれを一定の範囲内に限定するのにある。¹⁷⁾」という警視庁保安課長の講演(1929年)はその機微をよく伝えている。都市内の遊廓をできるだけ郊外に移転させるといった江戸幕府の政策も引き継がれており、大阪の飛田遊廓、名古屋の中村遊廓はその典型的な事例である。加藤政洋は「戦前

の新地は、江戸期には都市の周縁に位置していたものが明治期以降の都市の拡大によって市街地に取り込まれた花街の移転先として、さらには土地開発そのものを目的として開発された。¹⁸⁾」と述べているが、飛田遊廓や中村遊廓のケースは「土地開発」の比重が重いように思われる。

(2) 戦後の規制

戦後も「見えない壁を作る」という政策は引き継がれ、待合い・キャバレー等の風俗営業施設の住居地域における建築(建築基準法、1950年)や、学校や病院等から半径100m以内における営業(1964年の風俗営業等取締法風営法改正、以下風俗法と略記)が禁止されることとなった。さらに1966年の風営法の改正では、ソープランドの営業を都道府県条例で定める一定の地区のみで許可することとし、さらに学校や病院等から半径200m以内における営業が禁止された。1980年代に入ると、ノパン喫茶やファッションヘルス等の新業態が登場したが、従来の風俗法から「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律(以下風適法と略記)」へ名称変更するとともに、営業時間は午前0時まで、のぞき部屋、ファッションマッサージなども届出対象となるなど規制が強化された。1998年の風適法の改正によって、「無店舗型性風俗特殊営業(派遣型ファッションヘルスやアダルトビデオ等の通信販売)、映像送信型性風俗特殊営業(インターネット等を利用して客にパレノ映像を見せる営業)及び接客業務委託営業(風俗営業者等から委託を受けて風俗営業所等において接客業務の一部を行う営業)が新たに規制の対象となったが、半面これらの事業を合法化することに他ならなかった。しかし一方では都道府県の条例で定める店舗型フーズクの許可区域が全面的に禁止されるなど、法律改正によらない規制強化され、「見えないフーズク化」が促進されることとなった。

2005年10月4日、繁華街を抱える地元自治体・警察・国の関係者が出席して「大都市等の魅力ある繁華街の再生のための懇話会(主催:都市再生本部事務局・警察庁)」が開催され、以後東京都新宿区の歌舞伎町対策をモデルとして、全国的に大都市の盛り場を対象とした「都市の安全・安心の再構築」が図られることとなった。同年11月には風適法の大幅な改正法が公布され、一部の規定を除き2006年5月1日施行された。主な内容は、各種違反行為の罰則強化、客引き行為は従来から禁止されていたが、そのための人の前に立ちふさがり、つきまとうなどの行為も禁止、(デリヘル)に関しては、受付所や待機所なども店舗とみなされ、住所などの届出が必要、等である。客引き行為の摘発(逮捕)を容易にするため、は繁華街の「無料案内所」対策であり、効果の評価は数字で出すことが求められるためでもないだろうが、風適法違反の逮捕者は増加している。

3. “猥雑性”を担保した都市再生は可能か

2007年12月17日のロイターによれば、オランダの首都アムステルダム市のヨブ・コーヘン市長は17日、人身売買やマネーロンダリング（資金洗浄）、薬物乱用の取り締まりを強化するため、同市にある赤線地区を一掃し、売春婦が客寄せをする「飾り窓」を高級ブティックにする計画を発表した。政府がバックアップする歌舞伎町のクリーン作戦の裏には歌舞伎町の再開発があるように、アムステルダムにおいても再開発がらみのクリーン化が進行しているようである。このようなクリーン化（「見た目がきれいにならないじゃないか」としか筆者には思えないが）は世界的な傾向であり、“猥雑性”を担保した都市再生の可能性はますます低くなっているのが現状のようである。しかし一方では飛田新地に近接する通天閣の2007年度の入場者数が100万人を突破したことも報道されており、“猥雑性”のあるまちへの需要も根強いように思われる。「“猥雑性”を担保した都市再生の可能性は低いが可能ではない」ととりあえずの結論としたい。

補注

- 1) 鬼頭宏：文明としての江戸システム，講談社，pp.11-14，2002
- 2) 隆慶一郎：吉原御免状，新潮文庫，p14，1989より引用。ちなみに網野善彦は本書について、「なにより、遊里吉原についての隆氏の驚くべき学殖はただただ敬服するほかはない。（網野善彦：「無縁・苦界・楽」の行方 - 隆慶一郎とその世界，『隆慶一郎全集』第一巻，新潮社，1995）と激賞している。
- 3) 時代によっても異なるが、最高級の花魁と遊ぶ場合、おつきの者、芸者、幫間等がつくから、食事代込みで20両（現在の価格で約200万円）が最低必要であったという。もっとも遊ぶ時間は昼・夜とおしてあったから、現在の売春とはかなり異なることがわかる。（杉浦日向子：江戸へようこそ，ちくま文庫，pp.1989，pp.30-35）
- 4) 網野善彦：[増補]無縁・苦界・楽，平凡社ライブラリ
- 5) 九鬼周造：「いき」の構造 全注釈藤田正勝，講談社学術文庫，p.9，2003
- 6) 吉野俊彦：「断腸亭」の経済学，NHK出版，p.82，1999
- 7) 加藤攻洋：大阪のスラムと盛り場，創元社，pp.192-193，2002.
- 8) 菊池寛がキングに連載していた「東京行進曲」を日活映画で映画化する際の主題歌として、中山晋平作曲、西條八十作詞、佐藤千夜子歌で、1929年（昭和4）ビクターレコードより発売された。大滝詠一によれば「いろいろな点で流行歌の第1号と言われる作品」である（大滝詠一の日本ポップス伝 <http://www.geocities.jp/fujiskre/km92.html>）。
- 9) 津金澤総廣・土屋礼子編：カフェー考現学，柏書房，p40，2004
- 10) 小酒井不木：名古屋スケッチ（1928年の名古屋をスケッチしたもの），青空文庫，http://iaozora.net/cards/000262/files/46165_24892.html
- 11) 山田朋子：石川栄耀の盛り場論と名古屋における実践，人文地理55-2，pp.22-44
- 12) 石川栄耀：皇国都市の建設，常盤書房，1944
- 13) 松沢光雄：繁華街を歩く 繁華街の構造分析と特性研究 東京編，綜合ユニコム，1986
- 14) 北村隆一：鉄道でまちづくり，学芸出版，pp.177-180，2004
- 15) 売春防止法では、「売春」とは、対償を受け、又は受ける約束で、不特定の相手方と性交すること（第二条）と定義しているため、ファッションヘルスのようにオーラルセックスだけなら違法ではない。売春防止法が、日本的なフーズクの流行を促進した面がある。
- 16) 文庫14)のpp.40-41
- 17) 21) 永井良和：風俗営業取締り，講談社，講談社選書メチエ，p.236，2002
- 18) 加藤攻洋：大阪のスラムと盛り場，創元社，p.176，2002

都市の夜の魅力とフーズク街を排除しない都市再生の可能性について*

大矢正樹**

本論文では、時代毎の「盛り場」をフーズク街との関連でレビューするとともに、“猥雑性”を担保したまちづくりの可能性について検討した。フーズク街は今後ますます減少し、“猥雑性”を担保したまちづくりの可能性はさらに減少すると思われる。

The nocturnal lure of the city and the possibility of urban regeneration non-eliminating red light districts*

By Masaki OYA**

The purpose of this paper is to review the history of city planning and rebuilding in Japan on the relationship between busy streets and red light districts, and to discuss the possibility of urban regeneration that does not eliminate red light districts.